犬と人と花

小川未明

青空文庫

ある町はずれのさびしい寺に、和尚さまと一ぴきの大きな赤犬とが住んでいました。そのほかには、だれもいなかったのであります。

和尚さまは、毎日御堂にいってお経を上げられていました。昼も、夜も、あたりは火の消えたように寂然として静かでありました。犬もだいぶ年をとっていました。おとなしい、聞き分けのある犬で、和尚さまのいうことはなんでもわかりました。ただ、ものがいえないばかりでありました。

赤犬は、毎日、御堂の上がり口におとなしく腹ばいになって、和尚さまのあげるお経を熱心に聞いていたのであります。和尚さまは、どんな日でもお勤めを怠られたことはありません。赤犬も、お経のあげられる時分には、ちゃんときて、いつものごとく瞼を細くして、お経の声を聞いていました。

お寺の境内には、幾たびか春がきたり、また去りました。けれど、和尚さまと犬の生活には変わりがなかったのであります。

和尚さまは、ある日赤犬に向かって、

「おまえも年をとった。やがて極楽へゆくであろうが、私はいつも仏さまに向かって、今度の世には、おまえが徳のある人間に生まれ変わってくるようにとお願い申している。よく心で、仏さまに、おまえもお願い申しておれよ。おそらく、三十年の後には、おまえは、またこの娑婆

に出てくるだろう。」といわれました。

赤犬は、和尚さまの話を聞いて、さもよくわかるようにうなだれて、二つの目から涙をこぼしていました。

数年の後に、和尚さまも犬も、ついにこの世を去ってしまいました。

三十年たち、五十年たち、七十年とたちました。この世の中もだいぶ変わりました。

ある村に一人のおじいさんがありました。目の下に小さな黒子があって、まるまるとよくふとっていました。歩くときは、ちょうど豚の歩くようによちよちと歩きました。

おじいさんは、かつて怒ったことがなく、いつもにこにこと笑って、太い煙管で煙草を喫っていました。そのうえ、おじいさんは、体がふとっていて働けないせいもあるが、怠け者でなんにもしなかったけれど、けっして食うに困るようなことはありませんでした。

「おじいさん、今年は豆がよくできたから持ってきました。どうか食べてください。」

「おじいさん、芋を持ってきました。どうか食べてください。」

「おじいさん、なにか不自由なものがあったら、どうかいってください。なんでもしてあげますから。」

いろいろに、村の人々は、おじいさんのところにいってきました。そうして、おじいさんがもらってくれるのをたいへんに喜びましたほど、おじいさんは、みんなから慕われていました。

村で若い者がけんかをすると、おじいさんは太い煙管をくわえて、よちよちと出かけてゆき

ました。みんなは、おじいさんの目の下の黒子のある笑顔を見ると、どんなに腹がたっていても急に和らいでしまって、その笑顔につりこまれて自分まで笑うのでありました。

また、村の人々は、どんなに働いて疲れているときでも、おじいさんが、そこを通りかかって、

「いいお天気でございます。よく精が出るのう。」と、声をかけられると、人々は急に晴れ晴れした気持ちになって、また仕事にとりかかったのであります。

おじいさんは、この村では、なくてはならぬ人になりました。おじいさんさえいれば、村は平和がつづいたのであります。おじいさんは、若者の相手にもなれば、また子供らの相手となりました。

けれどおじいさんは、べつに富んではいませんでした。食べることに困らなかったというまでであります。そうして、乞食や、旅人の困るものには、なんでも余ったものは分けてやりました。

あるときのことです。村人は、畑から取れたものを持って、おじいさんの庭先へやってまいりました。

「おじいさん、これを食べてください。」といいました。

いつものごとく、にこにことして煙草を吸っていたおじいさんは、その日にかぎって、常よりは元気なく、

「もう、私は、なんにもいらないから。」と答えて、軽く頭を振りました。

村人は、どうしたことかと心配でなりませんでした。

その明くる日、おじいさんは気分が悪くなって床につくと、すやすやと眠るように死んでしまいました。いいおじいさんをなくして、村人は悲しみました。そうして、懇ろにおじいさんを葬って、みんなで法事を営みました。

「ほんとうに、だれからでも慕われた、徳のあるおじいさんだった。」と、人々はうわさをいたしました。

また、二十年たち、三十年たちました。おじいさんの墓のそばに植えた桜の木は、大きくなって、毎年のくる春には、いつも雪の降ったように花が咲いたのであります。

ある年の春の長閑な日のこと、花の下にあめ売りが屋台を下ろしていました。屋台に結んだ風船玉は空に漂い、また、立てた小旗が風に吹かれていました。そこへ五つ六つの子供が三、四人集まって、あめを買っていました。

頭の上には、花が散って、ひらひらと風に舞っていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　1」講談社
1976（昭和51）年11月10日第1刷発行
1982（昭和57）年9月10日第7刷発行
初出：「黒煙」
1919（大正8）年5月
※表題は底本では、「犬《いぬ》と人《ひと》と花《はな》」となっています。
入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班
校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班
2011年11月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬と人と花

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/